

Hughes, R. (2011). Teaching and Researching Speaking  
**Chapter 5 Approaches to Researching Speech(担当：p.123-139)**

#### 5.4 Examples of contrasting approaches in researching speaking

本章では、speech の研究の多様性を示すために、前半に、理論に基づいた質的研究、後半により量的な研究を提示する。

##### 5.4.1 How methods and research questions are woven into a position paper: a study of first language acquisition and prosody

- Speer and Ito(2009) “Prosody in first language acquisition –acquiring intonation as a tool to organize information in conversation” は、韻律に焦点を当てた第一言語習得研究について、包括的な調査をしている。広範囲にわたる先行研究を通して、先行研究での見解と方法を論じ、話し言葉の統語論の理解と、言語の発達について論じている。
- (Quote 5.5)幼児は発話の理解、発話自体に韻律を使用するということが近年の研究で示された。韻律の重要な役割は、韻律的句の群(prosodic phrasal grouping)と、イントネーションの重要性の二つの側面がある。
- 乳幼児の発話理解は、発話への注意、反応など標準的方法で測定されたが、幼児は認知的発達が限られているため、凝視やジェスチャーなど paralinguistic な合図から解釈する必要がある。応用言語学では、4か月の乳児の言語発達の合図を見つける為、多様な方法を用いて反応を検証し、脳の動きの研究も行う。(Concept 5.2 参照)
- 統語的処理と、韻律処理の関係性についての 1980 年代からの先行研究について、Speer and Ito は、不完全であり、タスク処理の必要性と子供の認知的発達の関係性が、重要であると述べている。子供は単語の適切なつながりと切れ目を聞いて理解するが、つながりと統語の関係性を理解しているのではなく、韻律からの統語情報の理解が何歳から、どのように習得されるのかも定かではない。韻律による合図と統語認識の仮説検証には、一般的に 3～7 歳児を対象に行われた。Ex) Tap/the frog with the flower と、Tap the frog/ with the flower の違い。
- Speer and Ito の論文は、厳密に構成された研究と理論的な疑問とそれらを実証するための実践的問題を結びつけている。

##### 5.4.2 A position paper on qualitative principles: clause, grammar and interaction

- Thompson and Couper-Kuhlen (2005) “The clause as the locus of grammar and interaction”では、話者が会話において判断に用いる重要な言語的特徴は、節であると主張する。
- 発話の際、話者が用いる形式を ‘format’ と呼び、相互言語学において重要なトピックだと述べる。話者の対話の始め方、turn-taking の他者との構築、終わった発話の繰り返し、という 3つの形式の重要な話者の行動に基づいた例を提示し、日本語と英語という cross-linguistic な比較により、論文はさらに説得力がある内容となっている。例えば、英語では、動詞句により後の発話が比較的早く

予測されるが、日本語では構文はより制限がない。しかし、日英の話者は、自分の話す番かどうかを示す句の境界線には敏感である。

- 談話分析では、言語的特徴が特定の相互的作用に値するという見解ではなく、特定の状況と先行研究に基づき、ある行動の一時的見解を発展させる。質的規範に従い、多様な証拠を集め、ある事例の解釈をする。
- 話の終わりを示す韻律的特徴、話の **turn** の統語的特徴、増大(**increment**, 話の終わりにさらに言葉をつけ加える事)、**turn** の解釈が困難な場合、において、話者は、句の形式に注意を向け、話者同士にとって分かりやすい **turn** を作ると著者たちは推測する。

#### 5.4.3 A qualitative 'privileged insider' approach

- Janne Morton は、'Genre and disciplinary competence: A case study of contextualization in an academic speech genre' (2009)において、**speech genre** の理解について独創的な方法を用いている。**speech genre** はあまり研究がされていない分野であるが、応用言語学では、主に民俗学的側面または言語学的側面に焦点を当てたものの2種類の要素がみられる。Morton は民族学的手法をとる。
- Morton は2つの学年の生徒が行った建築に関する **presentation** を比べ、教師の視点から、上手と下手に区分する。外的測定法ではなく、(教師の視点からの) クラス内部の評価方法を重視することは、測定において新しい要素である。3つのレベルに分け、各レベルから典型的な **presentation** を選び、スピーチで上手さと関係する点を分析した。このように、内部の評価に基づき **presentation** の詳細を分析することが、質的研究の強みとなる。話の談話、話の状況、言語的・非言語的特性の対処の仕方などが **Facet** 分析で厳密に調べられ、質的分析の強みとなる。

#### 5.4.4 An experimental and control group approach with pre- and post-testing to investigate fluency improvement

- これまでの例とは異なり、量的方法論の研究についてみていく。Blake(2009) 'Potential of text-based internet chats for improving oral fluency in a second language' では、**online** のチャットルーム会話がオフラインでの生徒の会話能力を向上させるかを検証した。言語処理の理論と教育環境を結びつけ、**RQ** の結論を教育的示唆としている。統制群と実験群を用いることで、**pre-**と **post-test** の結果の統計分析に基づく、有意差が、指導の違いと解釈できる、という手法の典型である。
- Blake は3群を用いて指導法が流暢さに与える効果を検証した。統制群は **online** 学習群で、教師から **e-mail** で事後フィードバックを受けた。実験群は、**online** 学習で **tutor** が学習に同時に加わった群と、**online** ではなく対面式の授業だった。結果、**chat-room** 使用が、会話の流暢さが最も向上した。このことから、対面式授業で最もスピーキング力が向上するように思われるが、クラスサイズの影響で教師と対話できる生徒は限られているため、**chat** で複数の生徒が同時にメッセージを送った方が流暢さにつながる、と結論づけている。

#### 5.4.5 Using a single-factor within-participant group experimental design to investigate oral performance

- 量的研究の2つ目の例として、James Wolf (2008) 'The effects of backchannels on fluency in L2

oral task production' を挙げる。backchannels(聞き手が、理解を示すのに用いる通常 non-verbal な応答)による異なる応答方法がスピーキングに与える影響を、話者の対話から検証した。1 要因 (backchannel) の被験者内検定の分析法を用いている。

- 日本語と英語の backchannel の使用の違いがスピーキングタスクにおいて流暢さに影響を与えるかを検証し、中級の EFL 学習者のスピーキングの流暢さに与える影響が大きいと仮説を立てた。日本人学習者は、口頭・口頭以外両方の backchannel で最も流暢さが高まると推測した。
- 14 名の中級の日本人学習者が、絵の描写をし、口頭・口頭以外の両方の backchannel、うなづくのみ、backchannel なしの 3 つの条件で実験を行った。結果、仮説通り、口頭・口頭以外両方で最も流暢さが高く、feedback なしが最も流暢さが低かった。
- 論文の弱い点としては、L1 での backchannel の仕方が L2 に関係していると結論付けているが、聞き手の feedback により話者は、緊張しなくなったという見方もできることである。

#### 5.4.6 Using a video corpus approach to allows a multi-modal analysis

- 最後の例として、多形式分析(multi-modal analysis)を挙げる。この分析では、様々な形式の伝統的言語分析 (語数、turn のタイプ、発話の長さなど) を用いてスピーチ理解につなげる。
- Clark and Krynch (2004)は、話者の視覚的合図を考慮しない理論は、不完全であると主張する。実験は、参加者がペアで一人が指令者、一人が組み立て役となり、10 のレゴモデルを作るという内容。グループ 1 は指令者が組み立て役を見ることができ、グループ 2 は見ることができなし。グループ 3 は、指令者がビデオで組指示し、それに従って組み立てるという実験を行った。グループ 1, 2 は、interactive、グループ 3 は non-interactive とした。model を作成にかかった時間、タスクごとの発話語数、deictic 語 (here, like this など) の使用など、様々な側面からタスクを検証した。
- 結果、interactive, non-interactive 間、interactive でも作業が見えるか見えないかの違い、全てのグループ間で有意差があった見えない場合、作業にかかる時間は倍かかり、使用語も増えた。ビデオ指示の場合はさらに長く時間がかかり、組み立てに誤りが増えた。interactive な作業において、ジェスチャー、作業、単語などにおいて、ブロックとその場所についてお互い確認するなど、細かい相互作用がみられ、より効率よく作業が行われた。
- この結果が示唆することは、話者と聞き手は、お互いが一人である時と同じ方法を用いないということである。

#### 5.5 New directions

- 応用言語学において、特にスピーキング研究に影響がある現在の方向性について最後に述べる。第一に、会話分析、言語習得、言語測定など様々な学問分野間でつながりがみえている。また、ビジネスや保健科学など分野を超えたつながりもみられる。
- 第二に、World Englishes (WE)と English as a lingua franca (ELF)の影響も大きい。政治的、教育的規準となる英語は主にネイティブスピーカーであることが多いが、多様性が重視されている。Ch.7 で ELF とコーパス研究の関係についてなど述べる。
- 最後に、テクノロジーの進歩により、基本的にスピーチのコーパスが進歩し量が増えより洗練されたものとなり、これからも進歩し続けるであろう。話し言葉の文法について特に効果があり、より

解明されていくであろう。特に2つのテクノロジーの進歩が話し言葉の理解に影響を与える。第一に、脳のスキャン技術を取り入れることが挙げられる。主に意味構築の過程が測定されてきたが、今後は他の言語的領域にも応用される。第二に、World Wide Webにより、異なるグループがデータをお互い公開し、分析することができる。

- データの直接入手と進歩を続けるテクノロジーによるスピーチの分析が今後、スピーチの基準を改良していくであろう。